

米國小児クリティカルケア学会において講演しました(2013/11/3)

場所：フェアモントホテル (ワシントン DC)
テーマ：「津波からの教訓：大規模災害時の医療対応」

11月3日(日)にワシントン DC での米國小児クリティカルケア学会において江川新一教授が招待講演を行いました。ワシントン DC にある国立小児病院は小児の救急医療に対してコマンドコントロールセンターを起ち上げ、すぐれた医療体制を構築しています。災害に対する意識も高く、東日本大震災におけるわが国の医療対応について講演する機会を与えられたものです。参加者は、小児科の中でも、集中治療に携わる小児集中治療医、小児麻酔科医、小児脳外科医、小児呼吸器科医および小児集中治療専門看護師であり、小児という日常診療のなかでも、また災害においても弱者となりやすい特殊性をとらえ、さまざまな職種が連携しなければ医療が成功しないことを熟知している集団です。江川教授は災害において小児がどのような状況におかれ、小児を救命するためにどのようなリスクがあるかを知り、リスクを減少させ、適切な医療対応はどうかを中心に講演を行いました。また、放射線・核災害で知っておくべき基本的な医療対応の知識についても触れ、放射線災害の際に被曝した患者さんの手当をする医療従事者が二次被曝を受けるおそれはほとんどないことを説明しました。

反響は高く、災害医療対応チームの特殊性と、その一方で本当に災害が起きたときにはどのように一般の医療従事者をチームに組み入れて対応すべきか、という質問がなされました。小児科医ではない医師が小児に対応しなくてはならない状況が発生すること、小児科医もまた成人のさまざまな弱点を知っていなければならず、どのように医療ニーズがあるかを集約して、救援を要請するかという on site team building の考え方、また災害は地震だけではなく台風、洪水、CBRNE(化学、生物、放射線、核、爆発)など all-hazards approach の考え方が重要であることを回答しました。

同時に 2015 年に仙台で国連により世界防災会議が開催されること、2014 年 5 月にワシントン DC で災害医療対応に関する国際シンポジウムを開催することもアナウンスし、日本学術振興会ワシントンオフィス、ジョージワシントン大学、日本大使館、米国集団災害医学会などを訪問し、関係者との打ち合わせを行いました。



ワシントン小児クリティカルケア学会で発表する江川新一教授



日本学術振興会ワシントンオフィスにて

文責：江川新一(災害医学研究部門)